般泥洹経に云く「当来の世仮りに袈裟を被て我が法の中に於て出家学道し懶惰懈怠にして此れ等の方等契経を誹謗すること有らん当に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の輩なり」等云云

当来世において、すなわちこれから先の世において、大乗を学しない懶惰懈怠にして、法華経を誹謗する悪い僧が生まれてくるというのです。どういうのが悪い僧となって生まれるのかというと、いま釈尊の出た時に外道のバラモンをやって、仏法の悪口をいっているのが、そういうふうに生まれてくるのだというのです。

そうなってくると、大聖人様の時代に良観とか、あるいは法然とかの弟子などになる連中は、いったい過去にどういう者だったかというと、昔、仏法をくさした外道の者が生まれてきて、形だけ仏法をやって、こんどは正法に邪魔するのです。大聖人様を迫害した良観たちが、いま生まれてきて仏立宗等の坊主になっているのです。ほんとうです、この原理からいうとそうなります。

そうでないとしたら、大聖人様がウソついたことになります。大聖人様をさんざんいじめた悪い者が、仏立宗日扇などという徒輩になったのです。いま仏立宗の坊主などをみたら、〝ああ大聖人様をいじめた者だな〟と、こう思えばいいのです。

霊友会でも立正交成会でも、天理教の教祖でも、みんなあれは仏法を悪くいってきた者が、あのようになって出てきたのです。それでいま、日蓮正宗が本尊流布するにあたって、邪魔をするのです。こんど、それではどうなるのかというと、あのような連中が死ぬと、こんどは日蓮正宗のなかに生まれてくるのです。そして蓮華寺の僧侶みたいになってくるのです。まことにこれはおもしろいものです。それがいまの議論なのです。

此経文を見ん者自身をはづべし今我等が出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外道が弟子なりと仏記し給へり

大聖人様は明確に、この経文に自分を恥じろといわれています。霊友会や仏立宗の連中に、ここをみせてもそうだというでしょうか、みえないでしょうし、わからないでしょう。僧侶にあったら折伏などしないで、ここのところを見せてやればいい。「此経文を見ん者自身をはづべし」のところに赤線を引いて、とんとんと三度たたいてみせてやればいい。折伏なんかしなくてもいいのです。

法然が一類大日が一類念仏宗禅宗と号して法華経に捨閉閣抛の四字を副へて制止を加て権教の弥陀称名計りを取立教外別伝と号して法華経を月をさす指只文字をかぞふるなんど笑ふ者は六師が末流の仏教の中に出来せるなるべし

私が仏立宗だ霊友会だと、いまあるものをいうと、戸田というのはよっぽどきらいとみえて、悪口ばかりいうと、こういうでしょう。だが大聖人様のいまの御書をみなさい。法然の一類あるいは大日が一類と、みんなこれらは六師外道の命をもった者が生まれてきているのだと、大聖人様がはっきりとこういっている。大聖人様のほうがずっと私たちよりひどい。私も弟子であるから、一生懸命まねして悪口をいおうと思うのですが、大聖人様の十分の一も百分の一もいえないのだ。よほど気がやさしいとみえる。

いまの御書ではっきりわかったでしょう。邪宗・邪教の者たちは、過去世において、大聖人様に敵対した者が生まれてきているのです。すなわち、法然の一類である念仏者、あるいは大日の一類である禅宗の者たちは、釈尊の時代の六師外道が、大聖人様が三大秘法を広宣流布するにあたって、僧侶になって生まれてきて敵対しているのであると。

いま、わが創価学会が広宣流布をして、日本民衆を救わんと立つにあたって、それを邪魔するのは大聖人様の時に邪魔した僧侶が、いま日蓮宗の仮面をかぶって生まれてきているのです。そういう原理がきちんと出ているのだから、こわいものです。三世の生命観に達すれば、きちんとわかるのです。三世の生命を信じなければ、この理論はまだわかりません。

（昭和三十一年二月七日　大阪・中之島公会堂）

崎尾師書簡 要旨

前略—風聞に依りますれば貴寺廃棄とか—然して今後は当時に於て学会員の紹介による授戒並に法要は一切致しません。尚本年一月下旬に当時扱い学会員信徒全部を名簿より削除致します。従つて二十七年二月以来三十年一月二十三日迄の御本尊を返納下されたく、二月一日以後は名簿のなき事なれば氏名理由等の記入を略し、御本尊の体数にて御受取り致します。

昭和卅年一月二十七日
大阪市北区野崎町六六
日蓮正宗　蓮華寺

大阪支部長
白木義一郎殿

天魔の血脈系譜（戸田会長の指導から）

（釈迦在世）—（大聖人在世）—（戦後の草創期）—（現在）

六師外道（バラモン教） → 極楽寺良観等（爾前・権教） → 邪宗日蓮系教祖（実教） → 阿部日顕（日蓮正宗）

寸鉄

一、寸鐵居士よ御僧侶を坊主なぞと呼ぶと地獄へ墮ちるぞ!!

二、寸鐵居士答へて曰く「御僧侶を坊主と言つた覚えなく、坊主を僧侶と呼んだおぼえは無い」。

三、坊主が御僧侶の衣をつけたのと御僧侶が坊主の姿に見えるのとは皆信心のはかりではかるんだよ。

二、七不思議を教えてやろう。

A日本國中破れ寺の數

B破れ寺で平氣な顔の坊さんと信者の顔。

C代官様の空偉張り。

D御僧侶を敬まわぬ信者。

E御僧侶のやきもち。

F何も知らんで偉張る事丈知つてる坊主。

G創價學會の折伏

三、そんなものは不思議でもなんでもないよ。日蓮正宗と言ふ最高唯一の宗教がそこいらへんの宗教と同一並になっているのを更に驚かない連中がある。東洋第一の不思議なんだよ。驚いたか。目がさめたかい。

先生は利益し国家は損失す。嗚呼愚痴邪智の徒輩よ、何の顔あつてか先生に見ゆるや。

検事・判事も、警視庁の木葉役人も、憲兵司令官も憲兵も、内務省のボロ役人も時の軍部の指導者も・今生きて居る者も死せる者も汝等の顔上に大法罪が現はれずして何処にぞ現はるゝ。先生の法難に関りて先生を悪にした坊主共よ、衣を捨て先生を捨てたる竜久他無共よ、懺悔滅罪せんと欲すれば我等が会に来つて先生の遺風を仰ぎ佛の御訓に随順すべきであるぞ・

坊主は社会の「無用の長物」

坊主ほど、日本再建の今日、無用のものはない。かれらは、なんのために法事や葬式にお経を読むのかということを、深く考えたことがあろうか。先祖代々、各宗各宗によって、葬式や法事のとき、お経を読んできた。自分も坊主になったのだから、葬式や法事に、師匠ゆずりの経を読む。そうして、お布施と称する労働代金をもらう。それで本人は不思議ないとしても、よくよく考えてみると、こちらでは不思議でならない。

お経を読むことは、なんのためなのか。葬式や法事になくてならない儀式の一つで、家族、知友が、それによって涙するだけの効能とするならば、酒宴の席上、芸者なるものが出てきて、三味線とかいうものを弾いて、客の興をたすけるのと、陰陽異なりといえども、その効能は同じである。そうなると、坊主と芸者は同じようなものであるが、芸者は女一人食うだけで、大きな寺のような建物をもっているものではない。坊主は大きな寺をもって、大威張りで労働代金を過分に請求する。一つの牧場で、小羊が食う草と、大象の食う草ほどの相違で、大変な無用の長物である。

坊主どもに、さも指導者のような顔をさせて、芸者のような職業をさせている民衆は、バカだとしかいえない。共産党の烈々たる闘士も、黄金の代表のような金融業者も、軍国主義の大親分方も、一度死に直面すると、また死んでしまうと、坊主が大威張りとなる。どういうわけだろう。習慣ですませないものがある。なぜなら、坊主の大先祖は釈迦であり、仏であらせられる。仏も釈迦も、世の苦難を救う大救世主であり、一大哲学者であり、大実践家である。なんのために、釈尊は経を読まれたのか。釈尊の教えを、そのままつがれた天台大師でも、章安大師でも、伝教大師でも、みな経を読んでおられる。経を読むことには意味があるらしい。

さて、今の坊主が、経をなんのために、死者のために読むのか。もし死んで、唯物論者のように、この世に、その人がいないなら、坊主の必要はない。死者がこの世にいるとするなら、どんな所に、どんなにしているのか。また、その生命に、どんな経文を、どんなにして読んだら良いのか。このような問題を、みずから深く掘り下げて、解決して、その上に、確信をもって経を読む坊主が、いく人いるだろうか。

しかも釈迦が、自分の経文は、自分の死後二千年したなら、どんなに読んでも効能がないと確言しているのに、その空の経文を、空々しく、これを知って読むものがあろうか。知らないとすれば、なおバカだ。このバカに、だまされるヤツは、なおバカだ。どんな意味から考えても、歌にもならず、役にも立たぬ経文を、しらじら読んで、『読み賃』を取って、食っている坊主は悪人でもあり、詐欺漢でもあり、非生産的な存在である。今日の日本に、こんな種類の人間を養う余力はない。ゆえに、吾人は叫ぶ。『現代の坊主は、まず放逐せよ！　さもなくんば重労働を課せ』と。

また、このような、わけのわからない存在に対して、疑問も持たないし、不思議にも思わないで、ただ親ゆずりと放任しておく一般大衆の無智、鈍感、封建性に対しても、われわれは、あきれざるをえないのである。余のことばによって、猛り狂う坊主あらば、来って法談せよ。なんじらに、みずからの道をあたえん。

大白蓮華　巻頭言（昭和24年9月10日）

文証理証Ⓘ「佐渡御書講義」